

社会福祉法人はる20周年記念誌 藤井克徳×西谷久美子対談 未公開パート

―藤井さんから西谷さんを全国きょうされん精神部委員に推薦され、西谷さんの活動の幅も全国、世界へと広がっていくことになったわけですが、その活動を通じて二〇一五年の十二月にヤマト福祉財団の「小倉昌夫賞」をいただくことになりました。ここでお聞きしたいのが、西谷さんを精神部委員に推薦した理由と、日本だけでなくヨーロッパやカナダに視察に行かれた際の印象や、日本でも取り入れてほしい、取り入れるべきと思われる施策などについてです。ぜひお話しただけですか？

藤井 はい。精神障害の分野というのはとにかく立ち遅れていて、日本の精神障害者の共同作業所の第一号は東京都小平市にある「あさやけ第二作業所」というところなのですが、ここがきょうされんが一番最初に手掛けた精神障害者の作業所になります。そうゆう伝統のあるきょうされんですが、いろいろ立ち遅れていたこともあり、その遅れを改善すべく、きょうされんの中で精神障害部会というものを立ち上げました。

その立ち上げ時の直接的な力になったのは「むぎの里」という、和歌山県和歌山市をメインに展開している法人で、その伊藤しずみさんという方がご自身も大変な中「責任者をやってもいい」と名乗り出てくれて、月刊誌の発刊、全国セミナーの開催などの活動や厚労省に対しても「これからの法律はこうあるべきだ」と提言もしていきましようという意気込みではまりました。

では、誰を役員に据えようかという話になって、全国からいろいろな顔ぶれを探していたのですが、委員の中から「西谷さんはいかが？」という声が上がりました。こういった声が上がったのは、もちろん西谷さん個人の人物もありますが、やはりパイ焼き窯での実績というものがちよつと他とは違う、いい意味で他とは違う面を持っている。その代表を務められている西谷さんに加わってもらおうと。それは西谷さんに限らず、京都にある「ほのぼのや」の方であるとか、他にも全国のきょうされん精神分野の中で地域ごとのチャンピオンに集まってもらおうと。その中で西谷さんには東京都心部の代表として就任してもらったわけです。この活動ではいろいろと面白い交流も生まれて、その延長線上で、定期的に海外研修も開催していました。

西谷 そうですね。まず、全国の精神部会に参加されているさまざまな方たちとの出会いというのは、非常に収穫が大きかったですね。全国の方たちと地域の実践、地域の連携をどう作っていくかの実践や政策的なところも学びましたし、とにかく仲良く話が弾んで、お互いに友達というか同志ともいえるような関係を築けたというのはとても幸せでした。

それから、海外視察は、視野が広がったというような抽象的な言い方ではなく、本当に良い勉強になりました。ヨーロッパの方だと、私はドイツとオランダの二か国に参加させていただきました。ここで共通しているのはまず「社会資源の整備」ですね。障害を持っている方の働く場としての社会資源がしっかりしていることや、グループホームにしても、一人一人がきちんとその人の住まいとして自由に裁量できる部分がちんと保たれている、そういった社会資源が整理されているところに非常に驚き、感銘を受けました。

大きいところでは四千人規模の州立の通所施設を見学させていただきましたが、そこでは一流メーカーの車のブレーキ製造のライン式作業や、体育館のような大きな倉庫での出荷のためのリフト作業など、日本では絶対に作業として提供しないだろうな、というような責任ある作業も普通に行なわれていました。そうゆう面も

含めて社会資源が保証されている、そこにびつくりしました。二つ目は、生活保障です。その人の今の生活の保障、命を含めた生活を保障しようという制度もすごく整えられていました。この二点に非常に感銘を受けたのが、ヨーロッパ視察でした。

それから、カナダのカルガリーにも視察に行きましたね。きょうされんの精神部会として全国から一クール八人前後の団体で二週間ずつ四グループに分かれて行ったのですが、そこでまずびつくりしたのは、クラブハウスでの当事者たちの活躍です。そこにたどり着くまでにたくさん運動や苦しみもあったと思うのですが、行政や当事者団体、大学までもが協力し合い、しっかりとした仕組みが築かれている。日本と全然違う！ということ強く感じました。またカナダと日本の違いとして感じたのが、個人個人、個別に整った制度があるということです。例えば、当事者同士が結婚した場合の住まいや暮らしの保証制度がある、当事者がちょっとしたことでも火事を起こしてしまっただけで住まいがない、そんなときでも行政がきちんと新しい住まいを保証する、みたいな制度がありました。また当事者が起業しようという時には、きちんと計画を立て申請すれば起業支援が行政として入る、企業で働きたい場合にも雇用の制度や仕組みがあるなど。個人が大きな組織に組み込まれるというよりも、個人としてどういう生き方をしたいのか？どういう働き方をしたいのか？個性としてどのようなものが特徴としてあるのか？このあたりの意識がカルガリーの仕組みの中にありました。

その二つの海外での勉強が、社会福祉法人はるで「新しい事業を作ろう」という思いを一層強くしました。特に当事者活動ですね。日本ではクラブハウス活動というのは制度化されていませんが、独自にいろいろ工夫しながら当事者が主になって、活動している団体が当時の日本にもいくつもありました。そこから二〇一〇年頃にクラブハウスの事業を法人はるでやりたいと提案し、時間をかけてより具体化しようと。その発想は視察ら学んだ部分が大きいです。

藤井　私は当時「W1」という世界の障害者の就労支援組織の理事をやらせていただいていたので、コロラド州のデンバーという空港からカルガリーに向かったことを記憶しています。海外に行くというのは現地での実践や社会制度の学びの部分も大きいのですが、もうひとつの副産物として、日本人同士の交流も深まります。オランダとドイツのツアーや、私や丸山さんと一緒に行ったコロラドでの実践でも深く知り合うという点では非常に大きかったと思います。そこでの経験が法人はるに持ち込まれ、西谷さんをさらに大きくし、法人はるを大きくしていった。

その結果が、ヤマト福祉財団の小倉昌男賞の候補に挙がって、二〇一五年に賞が送られたことはとても輝かしいことでした。障害者福祉の分野ではいろいろな賞がありますが、私はその中で一番重みのあるのはヤマト福祉財団の小倉昌男賞だと思っています。西谷さんが受賞されて本当によかったと思ったと同時に、パイ焼き窯と法人はるの実践が認められたということでもあるので、本当に大きな節目を作れたのではないかと思います。

―ありがとうございます。お話も尽きない状況ではあるのですが、実はお時間のほうがちょっと押していました、最後のパートに進めさせていただきたいと思えます。。。